

その曖昧さこそ、日本的な美しさです

彭 博

「日本人のEQは世界一高い」という噂を何度も聞きました。EQとは自分や他人の感情を理解することや、自分の感情表現の技術などを指します。日本人のEQが世界一、という理由は、日本に来てすぐにわかりました。

というのは、日本人の「はい」、「そうですね」は同意ですか。それともただの相槌ですか。「また今度」、「そのうち」は一体いつですか。「いいです」、「結構です」は肯定と否定一体どちらですか。「今晚一緒に映画に行きませんか。」「今晚はちょっと…。」「じゃ明日はどうですか。」「…。」日本に来たばかりの人はそういう言葉がわからなくて困ります。でも驚いたことに、日本人は普通に理解しています。まるで心が通じあっているようです。

しかし、日本に住んでいるうちに、この言葉遣いも次第に理解できるようになりました。その曖昧さ、遠回しな言い方は日本語の特徴だけではなく、日本的な優しさや、美しさなのです。それはなぜでしょうか。日本人が求めるのは以心伝心です。いつも相手を思いやり、相手の心を読んで行動したり、相手の立場に立って考えたり、だからこそ、はっきり言わなくても相手の意図が分かります。否定の言葉をはっきり言うと、きっと辛いでしょう。相手を困らせないように、自分が先に思いやる。そう考えてみると、日本人に染み付いている繊細さや心遣いは、なんと温かくて素晴らしいものでしょう。

私は、その日本的な曖昧さに惚れてしまいました。そして、この素敵で素敵な言葉の芸術を今、一生懸命学んでいます。断る時、直接言わないで、必ず積極的な言葉を使うとか、相手の立場から話すとか、評価する場合は堅い「だめです。」と言わず、その代わりに「何々がいいと思いますよ。」などを使います。例えば、「中日交流会で紹介する食べ物として、麻婆豆腐はどうですか。」と聞かれたとき、昔の私なら「それは普通すぎて面白くないですね。」と返事をしたでしょう。でも今なら、「それいいですね。でも、麻婆豆腐より、中国にしか

ないものの方がもっといいと思いますよ。例えば…」そう言うと、相手の気持ちは悪くならないでしょう。言い方はその人の考え方を形成します。人間関係が苦手な人が増えている現在、その伝統的な「おもてなしの心」は重大な意義を持つと思います。

日本の文学も、その曖昧さのおかげで特に味わいがあります。小林一茶の俳句「花の陰 赤の他人は なかりけり」簡単な文字ですが、咲き誇る花の下に、にぎやかなお花見が行われている。皆笑ったり、話をしたりしている、そんな光景が鮮やかに見えるでしょう。言いたいことを直接言わずに考えさせることこそが、俳句の醍醐味です。はっきり言わないからこそ、想像が広がります。見事だと思いませんか。

昔、夏目漱石が英語教師をしていたとき、「I love you.」を生徒が「あなたを愛しています。」と翻訳したら、「日本人が『愛しています。』なんて言うものか。『月がきれいですね。』それで十分だ。」と言ったそうです。この表現は本当にロマンチックです。

今時にはわからない表現もあって、日本人にもその曖昧さは捨てた方がいいと言われても、私はその曖昧さこそ、日本語の本当の美しさだと思っています。日本語の勉強を通じて、私もこのような「言葉の芸術」と「おもてなしの心」を身に着けたいです。

ご清聴ありがとうございました。

(1368 文字)